

「またまた橋下市長の話題になって恐縮である。いよいよ「船中八策」で国政に挑戦するらしく、橋下さんは完全に時の人となった。ボクは、旧知の中川治衆院議員が、「泉州八策」と名付けて、民主党にあって頑固に政策を貫き通す姿を幾度か紹介してきたので、橋下さんがパクった気がして、心地良かった（失礼！）。

橋下さんが聞いてくれるなら、かつて「なび」でも披瀝したボクの「福祉特区」を「船中八策」に取り上げてくれないかなあと思っている。橋下さんも「西成特区」を模索されてるから、あながち遠い関係ではないのかもしれない。

生活保護はある種聖域なのだが、「生活保護多住地域」に限って、自治体の関与を大幅に認めて貰えないか。つまり、単年度決算で、個人への直接支給だが、例えば5年分ぐらいの保護費を一旦国から自治体に預けてもらい、運用益と自己資金によって、保護費の消費が地域の資産になっていく好循環を作れないかというのが、ボクの「福祉特区」の根幹なのである。

現在のままでは、賃貸住宅の家賃が住宅扶助額の4万2千円に「上下移動」して、生活保護以外の人々が西成に住めにくくなるという悪循環が起こっている。ボクは、国の密集市街地の賃貸住宅の共同建替支援事業を活用して、家賃補助の付いた良質な新築住宅を供給して、生活保護の人々も快適な居住を得られ、若者世帯にも喜ばれ、さらに介護サービスを付与して高齢者世帯にも喜ばれてきた。大阪市の負担分は概ね



## 福祉に優しい橋下市長を期待する

1/3なのだが、これに土地取得費等への助成を付加できれば、共同建替は加速するわけで、その原資に5年の運用益を活用できないかという提案である。そうすると、「生活保護多住地域」が、多様な人々を受け入れるコミュニティに変貌することになる。この論法で、自治体が育てる「新たな公共」を媒体にした「医薬品の共同購入」で医療扶助の低コスト化を計れないか。はたまた、橋下さんが提唱するバウチャー政策で、食堂や古着屋、銭湯、健康づくりなどのコミュニティ・ビジネスを振興できないか。結核の罹患率が報道されているが、西成区的环境美化事業の原資としても活用できないか。西成区に係る生活保護費はざっと600億円で、5年なら3000億円、運用益は1%でもざっと80億円にはなる。「アセット・ベース福祉」という

のは、欧州で試行され始めた子育て世代や若者を対象にした資産形成型福祉という新しい試みだが、「地域の資産」を福祉で形成することで、個人をインクルージョンするというのがボクの志向だ。

ボクが言っても絵空事でも、橋下市長の言なら俄然現実味を帯びる。ただ多くの関係者の共感が必要で、橋下市長が、実は福祉に優しい人だという発信が不可欠だ。橋下さん、報道される「結核をなくす」との語尾にいささかの不安を感じるのですが、ボクは「ホームレスのいない西成」ではなく、「ホームレスに優しい西成」をめざしてるのですが、橋下さんもきっとそうですよね。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの  
この逸編

# モーターサイクル ダイアリーズ



脚本書：R.レッドフォード  
監督：ウォルター・サレス  
原作：エネスト・ラファエリ・ゲバラ  
脚本：ホセ・リベラ  
キャスト：ガエル・ガルシア  
ロドリゴ・デ・セラ  
製作：2004年英・米  
カラー126min  
DVD発売元：日本ヘラルド映画株式会社

アメリカ大陸横断を繰り返した作家J・ケルアックの著書「オン・ザ・ロード」は、50年代に著したゲバラの「南米旅行記」と時期的に重なる。米国ビートニクといわれた反逆者世代の放埒な青春をモチーフにした記録文学だった。60年代に封切られたアメリカン・ニューシネマ「イージー・ライダー」は、マリファナで稼いだ金を元手に、チョッパーバイクにまたがり、南部への旅行途上で惨殺される青年たちの物語だった。

そして「モーターサイクル・ダイアリーズ」は、チェ・ゲバラが残した「南米日記」をベースにした04年製作の映画だ。ブエノスアイレスからベネズエラまでの1万余キロ。旅への思い断ちがたい二人の青年が、オートバイ「怪力号」を操り国境を越える。

いろいろな作品が旅への憧憬を文学や映像に著しているが、この映画では、自らの病と付き合いながら、家族や友人たち、鉱山労働者、農民、医師や患者たちとの関係

性に加え、南米の過酷な社会的現実を垣間見せ、主人公と対峙する。旅を介してその後の“チェ”への萌芽が見られ、将来彼が背負うべき役割と兆しをこの映画は想像させる。

アルゼンチンからチリーの国境を越える際の感慨や、雪のアンデスを迷走し転倒するバイク、牛に突っ込んでバイクを大破させ、その後はヒッチハイクで砂漠を横断したり、マチュピチュ消滅の歴史を懐疑し、また、アマゾンを渡航する船中での猥雑さなどをユーモラスに挿入させながら、二人がサンパ・プロでのハンセン病療養所で働く過程が描かれる。ちょっと悲しく、しかしユーモラスな後半は、この療養所でのシーンで占められる。療養所での規約である手袋をはめ患者に接することを拒否する場面がある。

「私たちの強みといえば、どちらもハンセン氏病を恐れないことでした。(中略) 伝染性のものではないと確信していましたから、手袋すらもって行きませんでした」。これは「怪力号」でゲバラと同伴したアルベルト・グラナドの後年の証言である(「チェ・ゲバラ」03年/原書房)。グラナドは生化学者で、現在もキューバで暮らす。

「この時、彼は患者さんたちの優しさにたいへん感激したと思います。50年後にして思うと、この時すでに、一部の人のための医学という発想を捨て、いわば人々のための、貧しい人々のための医学を考えるようになったのですね」。

この映画では、大仰で、偶像やアイコンとして祀られるゲバラではなく、瑞々しい感性を持つ青年として描かれていた。しかもグラナドの言葉が、ゲバラの核心を言いつくっていて、この映画の、そしてゲバラの事実を確認できた逸編だった。

hidarimaki

